

I
甲骨文略說

はじめに

中国で歴代書き継がれて来た、ふつう二十四史と呼び慣らわされている正史の冒頭を飾るものが、前漢の中頃に司馬遷によって著された『史記』であることは周知の通りである。彼は、五帝に筆を起こし、夏・殷・西周・春秋・戦国から秦・漢に及ぶ歴史をそこに展開し、各王朝の王系や事跡についてかなり細かな記述をしている。彼の考案になる独特な年表も附され、そこには西周の末期に近い共和以後の各王在位年数も明記されていて、この共和元年（西暦紀元前八四一年）は、今日でも、中国史上その実年代を知りうる最古の年ということになっている。また晋代になって戦国時代の魏王の墳墓から出土した竹簡に書かれていたと伝えられる『竹書紀年』にも、五帝から戦国末までの編年があり、これは『史記』とは別系統の史料によって作製されたものらしい。

今日われわれに残されているこれらの文献が、古代の中国を知る上で極めて貴重な史料であることはもとより言うまでもない。しかし今から二千年以上も前の人間が、さらに二千年も溯さかのぼって詳細な記述を残したのだと考えるとすれば、われわれがそれをそのまま事実として受け入れるわけにいかないのは、常識的に言っても明らかであろう。清朝になって西欧史学の影響を受けて遽たじかに隆盛し、古典批判に多大の成果を取めた考証学派の人々や、さらにそれを発展せしめたいわゆる疑古派の人々が、五帝はもとより夏・殷王朝の实在を疑い、西周時代に関する諸伝承も後世になって仮託した理想世界に過ぎないとしたのも、その限りでは当然のことであった。

ところが、事實は必ずしもそうではなかった。司馬遷が殷代について書き残してくれたことは実はかなり正確なものであったことを立派に証明してくれるものが、われわれの前に現れた。それがこれから述べようとする甲骨文なのである。

発見と研究のはじまり

一八九九年、北京に住む国子監祭酒・王懿榮の食客で金石学に造詣の深かった劉鉄雲が、瘡病の薬として薬材店から購入した獣骨らしきものを見て、一驚した。そこには青銅器に鑄込まれているいわゆる金文よりもさらに古拙な文字が刻りつけられていたからである。王懿榮とともに、この蒐集に力をそいだ彼は、まもなく、その字体の古さや、出てくる人名に十干の用いられている点が『史記』などと合致することなどから、これが殷代のものだと感じとった——という話が、甲骨文のはじめて世に現れたときのこととして伝えられている。金石に明るい劉氏が、たまたま薬として購入したなどというのはいずれも話がうまく出来すぎていて、あまり当てにはならぬかも知れない。しかし、うますぎると言えば『史記』の記載に合いそうだという方が、実ははるかにうますぎるのであるが、これは誤りなかった。もつとも、これがはっきり立証され、正確な時代決定がされるには、多数の人の研究をまたねばならなかったが。

とにかく、劉氏は、その後まもなく歿した王氏の後をうけてこの蒐集・研究に努力し、一九〇三

年には、精選した一〇五八片の拓本を『鉄雲蔵龜』として出版した。甲骨文が初めて世に紹介された書籍として名高い。その翌年、この書を見て感激した経学・金石学の大家であった孫詒讓そんじじょうは、解読を目指して『契文举例』を著した（ただし、刊行はかなり遅れた）。彼もまた、この甲骨文が殷代の所産であることを疑っていない。この二著は、甲骨文が発見された最初期において、これ以後の研究の先鞭となった記念の紙碑である。

劉・孫二氏と親しかつた羅振玉らしんぎょくも、この研究に精根を傾けた。それまで、甲骨の出土地が骨董商によつて河南省湯陰県などと伝えられていたが、実はもう少し北の安陽県小屯村のいわゆる殷墟から出土することを知ると、家人を派遣して調査させ、後にはみずからこの地に赴いた。また蒐あつめた甲骨の拓本影印本をつくり、『殷虚書契』（一九一三年）、『同菁華』（二五年）、『同後編』（二六年）、『同統編』（三三年）などとして続々刊行した。これらには極めて秀れた甲骨が多数収められていて、今日でも非常に史料的价值が高い。さらに、羅氏は解読にも力をそそぎ、『殷虚書契考釈』（一四年初版、二七年増訂）を完成したが、これは孫氏の解釈を改めるところ多く、画期的な業績であった。

我が国でこの研究にはじめて着手したのは、東京高等師範の林泰輔博士である。謹直そのものと言われた氏が、この研究によつて「旧志の足らざる所を補ひ、漢唐諸儒の謬説を一掃することを得べし、これ豈痛快の事にあらずや」と言っているのをみても、その喜びようが解ろうというものだ。

ある。日本に将来された甲骨を蒐めて刊行された『亀甲獸骨文字』（一九二一年）は氏の編になる。これとほぼ同期に、京都の内藤湖南・富岡謙蔵といった人々も手を染めている。このように、ひとたび世に現れるや、秀れた学者達の注目をあび、興奮させた甲骨とか甲骨文とか呼ばれているものは、いったいどのようなものなのか。

甲骨文の材料・使用法

殷王朝にあつては、亀甲や牛骨などの裏面を焦灼しょうしやくすることによつて表面にヒビ割れを生ぜしめ、そのヒビの入り方によつて、祭祀・軍事・狩猟などさまざまな王の行為であるとか、降雨などの自然現象とかに關して、天上にいると彼らが考えたところの神（上帝）の意志を尋ねるのを目的とした占卜せんぼくを行った。占つたのち、その内容や結果を表面のヒビ割れのそばに刻りつけた、それが甲骨文である。今日までに出土した総数がおよそ十萬片とは言われているものの実はもう少し少ないだろうと思われるこれら甲骨は、すべて小屯村を中心に大司空村・四盤磨村などを含めて殷墟と総称されている一帯から出土したものであるが（本書37頁の図5を参照）、実はここ以外にも三、四十ヶ所から、少数ずつではあるが、発見されている。ただし、これらには後述の三例ほど以外には文字が見られず、ただ占卜した灼痕があるのみである。したがつて、甲骨文という場合はもちろん、甲骨という時にもふつうには殷墟出土のものを指すのであり、本稿でも特に断らない限り、これに従

つておこう。

用いられた材料としては亀甲と牛骨があり、統計が無いから確実なことは言えないが、今日までの出土数のうち、この両者はほとんど相半ばしているように思われる。占卜の内容と、甲・骨の間との関連はなさそうである。しかし、後にやや詳しく述べるように、甲骨文はその作製時代によって五期に分類することが可能であるが、その各期について見ると、かなりの違いがある。たとえば、第一、二期には亀甲の方が多いが、逆に第四期は牛骨ばかりで亀甲はまず見出しがたいようである。また牛骨はどこでも入手できるが、亀甲はかなり遠方からわざわざ運び込まれたらしいことが、甲骨文の記載から推測できる。こういった事情から考えると、亀甲の方が重んじられていたようで、牛骨は何らかの事情で亀甲を入手しえなかった際の代用であったかも知れない。

はたしてそうだとするなら、なぜ亀甲が重視されたのか。これは殷人にこのような占卜を行わしめた宗教観念と関係することであろうが、亀が「天田地方」の形をしている故に宇宙の象徴とみなされ、したがって、ここに天意の表徴を求めたのだとする説がある。しかし、亀甲のうちでも、腹甲が主として用いられて背甲は副次的なものだったことを考え合わせると、むしろ腹甲の形が大略、亞字形をしていることと関係があるのかも知れない。というのは、殷墟の大墓が亞形をしていたり、殷代青銅彝器いぎには亞形の図象銘をもつものが多く、また殷墟出土と伝えられる青銅印には亞形にふち取りしたものがあなどから知られるように、亞形そのものが、何らかの意味で彼らの宗

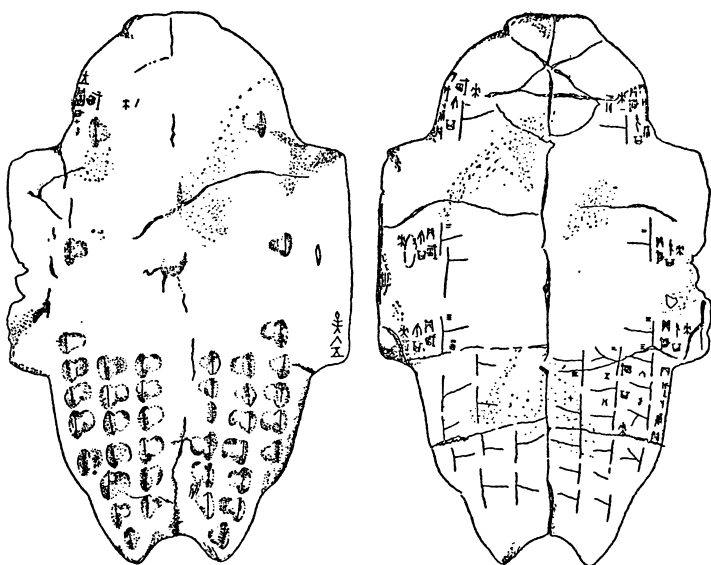


図1 腹甲全形。右：表面、左：裏面（乙6668・6669）

教観と密着していたことがわかるからである。

甲骨の使用法について触れておこう。亀甲の場合、まず背甲と腹甲を鋸のこぎりで切り離し、内臓を除去する。腹甲の場合にはそのまま周囲を削って形を整えるだけであるが、背甲を使用する際は、縦に折半し、更に周囲を削り取る。牛骨にあつても、骨端などをきれいに削って、なめらかにする。そのあと、裏面にまず鑽きんといわれる円形の凹みぼを入れる。次いでその側らかたわに鑿きといわれる深い切り込みをつくる。大部分はこのやり方であるが、少数の牛骨には、鑽の中央部に鑿を施しているものもある。こうして整治し、清めた上で占卜の儀式が始まる。鑽の上に、お